

ローマ人への手紙第七回質問

3 .. 24 神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖あがないを通して、価なしに義と認められるからです。

3 .. 25 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥なだめのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。

(ロマ三章二四―二五節／新約約2017)

(問一) 24、25節では義と認められることをどのように説明していますか。

(問二) 義と認められることは、どのようにして達成されますか。

(問三) 神に義と認められるために、信仰はどんな重要な役目を果たしますか。

(グループ聖書研究・聖書を読む会手引より)



なだめの供え物

(ロマ三章二五節)

罪のある汚れた人間が、聖い神と、どのようにして交わる
ことができるかどうかということは、永遠の謎です。わたし
たちが罪とか聖さというものをいいかげんに考えるなら、話
は別ですが、罪、汚れと聖さとは、永遠に相いれないもので
す。ですから、人間が罪を犯し、醜く汚れはててしまったの
ち、聖い神とは、永遠に離れた存在になってしまったはずで
すが、神は実に不思議な方法によって、罪に汚れたわたした
ち人間を、聖い神との交わりの中に回復してくださいました。
これが、聖書の教えている救いの事実であり、単なる教えで
はありません。この救いの事実は、御子イエス・キリストに
よって成し遂げてくださいました。それを、ここでは「なだ
めの供え物」という言い方で説明しています。わたしたちは、

きよう、この「なだめの供え物」という救いの驚くべき事実について学び、主のみこころを教えられたいと願っております。

さて、ここで「なだめの供え物」ということばが使われていますが、ヨハネの第一の手紙二章二節、四章一〇節でも、同じことばが使われています。ここで使われていることばは、原語では、同じ動詞から出ているようですが、少し違ったことばが使われています。⁽¹⁾しかし、ここで使われているヒラステーション⁽²⁾という原語を使っている個所が、新約聖書の中に、もう一個所あります。それは、ヘブル人への手紙九章五節です。そこは、新改訳聖書では、次のように訳されております。

「また、箱の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。」この「贖罪蓋」と訳されているのが、この同じことばです。この訳はちよつとわかりにくいので、現代訳聖書で見えますと、次のように訳しておきました。

「また、箱の上には、栄光に輝くケルビムと呼ばれる御使いの像があつて、贖罪所と呼ばれる黄金のふたをおおうように翼を広げていた。」この訳では、「贖罪所と呼ばれる黄金のふた」と訳してあります。つまり、契約の二枚の板を納めてある箱の上をおおっている黄金のふたのことで、これはまた贖罪所と呼ばれました。これをヒラステーションと言うのです。

これは、旧約聖書の出エジプト記二五章一七―二二節に出て来ますが、この契約の箱のふたである贖罪所のことを、ヒブル語では、カッポレト⁽³⁾と言っています。七十人訳のギリシャ語聖書では、このことばを、ヒラステーションと訳し

ているのです。罪に汚れた人間は、神と出会うことも、交わりを持つこともできません。そこで、年に一度、大祭司が動物の犠牲の血を持って、神殿の中の至聖所に入り、民の罪を贖うために、その血をこの贖罪所にふりかけました。こうして、聖い神は、罪人たちと会うことができるようにしてくださいました。ローマ・カトリックのフランシスコ会訳の聖書は、この個所を、そのように訳し、「あがないの座」としています。

この個所を、このように解することは、決して間違いではありません。ところが、わたしたちが使っている聖書は、新改訳聖書も口語訳も文語訳も、みな「なだめの供え物」と訳しています。それにはそれなりの理由があるわけです。

ところが、「なだめの供え物」という考え方がおかしいと言つて反対する人々がいないわけではありません。なだめと言ふからには、なだめられなければならぬ怒りというものが存在するはずであり、神を怒りの神と考えることになりはしないだろうかと言ふのです。こういう人々の考え方は、怒りの神というのは、旧約聖書に出て来るユダヤ人の神観であつて、新約聖書の神観とは違ふと言ふのです。新約聖書において、神は愛であつて、怒りとか義という観念は、旧約的ユダヤ人的であるというわけです。それでは、旧約聖書ばかりでなく新約聖書にも出て来る神の怒りというものは、どのように考えたらいいのかというと、指を火に近づけるととき、痛みを感じるようなものだと言ひます。つまり、神の怒りというものを否定し、人間が罪を犯したとき、神がそのことに

よって苦しむことを、こうした言い方に表わしているにすぎないのだと説明します。しかし、はたして聖書は、このような人々が主張しているような意味で、神の義とか、神の怒りというものを教えているでしょうか。次のみことばは、はつきりと神の怒りが罪とそれを犯した罪人に対して下されることを主張しています。

「あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げています。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。……党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは……悪を行なうすべての者の上に下ります。」

怒る神について考えるのは、冒瀆的であるとし、そのような神をなだめるといふ思想は異教的だとする批判は、実は聖書をよく知らないところから来ています。神の怒りについては、愛の使徒と呼ばれたヨハネも、その福音書の中でしるしておられますし、主イエスご自身も、あの金持とラザロの譬話の中で、はつきりとこの思想を語っておられますし、またマタイによる福音書二五章にしるされている譬話の中でも、そのことを語っておられます。パウロは、アテネのアレオパゴスでの説教の中で、「神は定められたひとりの人により、義をもつてこの世界をさばくために日を定めておられるからです」と語っております。また、黙示録では、「御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒

りの大いなる日が来たのだ⁽¹⁰⁾」と言って、はっきりと神の怒りについてしるしています。

それでは、どうしてこのようにはっきりと聖書に教えられている神の怒りについての文を否定しようとするのでしょうか。それは、神について、また人間の罪について、聖書の教えているところを受け入れないからです。そして、「なだめの供え物」についても、「なだめの供え物」という場合、怒っておられる神に対して、罪を犯した人間がささげ、神の怒りをなだめるわけですが、聖書が教えている「なだめの供え物」は、人間がささげるのではなく、神によって提供されました。

そこで、わたしたちは「なだめの供え物」について考えるに当たって、その「なだめの供え物」が成り立つための四つの要素について考えてみなければならぬと思います。

- 一 取り除かれなければならない罪。
- 二 なだめられなければならない被害者。
- 三 罪を犯した加害者。
- 四 罪を贖うための犠牲―償い。

ふつうの場合を考えてみますと、罪によって損害を被った被害者が、罪を犯した加害者の償いによって、たとえ原状回復にまでは至らずとも、なだめられなければならないのです。そういう観点から見ても、なだめの供え物というのは、異教的であり、幼稚な考え方だと批判されるのです。怒っている神をなだめすかすために、何かを持って行くというような思想は、神に対する冒瀆だと言われるわけです。しかし、聖書の

教えているところは、これと全く異なります。もしもこのようなものであったとしたら、確かにこのような批判はもつともなものであると思います。しかし、聖書が教えているのは、被害者であられる神が、こともあるうに加害者のために犠牲を払い、加害者を救済してくださったのです。しかも、御子の犠牲の死によつて、これを成し遂げてくださいました。それが「なだめの供え物」なのです。

こうして、神がいかに恵み深いお方であるかということが表わされたわけです。しかも、それだけではなく、神の義もいかになく全うされました。神は正しいお方です。ですから、罪をただいいかげんに見過ごし、そうすることによつて、わたしたちを赦すということはできません。罪と罪を犯した者に対しては、これを罰しないではおきません。これが神の義の要求です。この神の義の要求を、神は御子によつて全うされました。御子イエス・キリストは、わたしたちの罪を背負われ、その罪のために十字架上で、神から罰を下され、死なれました。それは、わたしたちが死ななければならぬわたしたちの罪のための刑罰でした。こうして神の義の要求が全うされることによつて、神はこのキリストを信仰によつて受け入れる者を、救ってくださいます。つまり、キリストに免じて、罪を赦してくださいさるのです。それが、ここで言われている「このキリスト・イエスを、その血により、信仰によつて受けるべき、なだめの供え物として、公けに示された」というみことばの真意なのです。ですから、この個所は、現代訳聖書に訳されているように、わたしたちの救いが神によつ

て用意されたということにほかなりません。「神は、このキリスト・イエスを、私たちの身代わりとして十字架上で死なせ、私たちがそれを自分のためであるとして、信仰によって受け入れるようにと求めておられる。こうして、神の救いが示された。」

これほど驚くべき真理を、わたしたちは知りません。ですから、この神の救いの真理がほんとうにわかったなら、わたしたちはじつとしていることができなはずです。わたしたちはそのままにいることはできず、全く新しい人間に変えられるはずです。

注(1)ヨハネの第一の手紙二章二節、四章一〇節で、「なだめの供え物」と訳されていることばは、原語ではヒラステーション (ἱλαστήριον) ではなく、ヒラスモス (ἱλαστήριον) ということばが使われています。

(2)「なだめの供え物」(三・二五)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、ヒラステーション (ἱλαστήριον) ということばが使われています。

(3) ἱλαστήριον

(4)ここで、ヒラステーション (ἱλαστήριον) を、「なだめの供え物」と訳したのは、ヒラスコマイ (ἱλάσκειν) という動詞の意味から押しはかったものです。この動詞は、「なだめる」とか、「つぐなう」という意味で、ヒラステーション (ἱλαστήριον) は、その動詞から来ている中性名詞です。

(5)ローマ教会への手紙二章五―九節。

(6)ヨハネによる福音書三章三六節 新改訳。

(7)ルカによる福音書一六章一九―三一節。

(8)マタイによる福音書二五章三一―四六節。

(9)使徒たちの働き一七章三一節。

(10)ヨハネの黙示録六章一六―一七節 新改訳。

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

Rom 3:25

<聖書翻訳比較ノート>

【新改訳2017】神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。

【新改訳改訂3】神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。

【口語訳】神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、

【新共同訳】神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。

【LIB改訂】神はキリスト・イエスを遣わして、私たちの罪に対する償いをさせ、私たちへの怒りをとどめてくださいました。神は、私たちをご自分の怒りから救い出すための手段として、キリストの血と私たちの信仰とを用いられました。たとえ、それまでの時代に罪を犯した者たちを罰せられなかったとしても、神は完全に公正であられるのです。キリストが来て人々の罪を取り除く時を、神は待ち望んでおられました。

【NKJV】 whom God set forth as a propitiation by His blood, through faith, to demonstrate His righteousness, because in His forbearance God had passed over the sins that were previously committed,

【KJV】 Whom God hath set forth to be a propitiation through faith in his blood, to declare his righteousness for the remission of sins that are past, through the forbearance of God;

【NIV】 God presented him as a sacrifice of atonement, [[25] Or <as the one who would turn aside his wrath, taking away sin>] through faith in his blood. He did this to demonstrate his justice, because in his forbearance he had left the sins committed beforehand unpunished—

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面

Rom 3:25

ὄν προέθετο ὁ θεὸς ἱλαστήριον διὰ [τῆς] πίστεως ἐν τῷ αὐτοῦ αἵματι εἰς ἔνδειξιν τῆς δικαιοσύνης αὐτοῦ διὰ τὴν πάρεσιν τῶν προγεγονότων ἁμαρτημάτων

<文法解析ノート> Rom 3:25

- [1] ὅς ὄν apram-s 関代 対男単 この～
- [2] προτίθημι προέθετο viam-3s 動 直アオ中3単 しようとする
- [3] ὁ ὁ dnms 冠 主男単 冠詞(この、その) [4] θεός θεὸς n-nm-s 名 主男単 神
- [5] ἱλαστήριος ἱλαστήριον (ヒラステーリオン)
ap-an-s 形 対中単 なだめるもの、なだめの供え物
- [6] διὰ διὰ pg 前 属 ～を通して、～の故に、～のために
- [7] ὁ [τῆς] dgfs 冠 属女単 冠詞(この、その)
- [8] πίστις πίστεως n-gf-s 名 属女単 信仰
- [9] ἐν ἐν pd 前 与 中に、間に、で、よって、に、
- [10] ὁ τῷ ddns 冠 与中単 冠詞(この、その)
- [11] αὐτός αὐτοῦ npgm3s 代 属男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに
- [12] αἷμα αἵματι n-dn-s 名 与中単 血
- [13] εἰς εἰς pa 前 対 ～へ、まで、のために、に対して
- [14] ἔνδειξις ἔνδειξιν n-af-s 名 対女単 公に示すこと、証明
- [15] ὁ τῆς dgfs 冠 属女単 冠詞(この、その)
- [16] δικαιοσύνη δικαιοσύνης n-gf-s 名 属女単 正しさ、義
- [17] αὐτός αὐτοῦ npgm3s 代 属男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに
- [18] διὰ διὰ pa 前 対 ～を通して、～の故に、～のために
- [19] ὁ τὴν dafs 冠 対女単 冠詞(この、その)
- [20] πάρεσις πάρεσιν n-af-s 名 対女単 見のがすこと
- [21] ὁ τῶν dgnp 冠 属中複 冠詞(この、その)
- [22] προγίνομαι προγεγονότων vpragn-p 分 完了能属中複 以前になされる
- [23] ἁμάρτημα ἁμαρτημάτων n-gn-p 名 属中複 罪